



はじめての心電図 第2版増補版 兼本成斌 著

●B5・頁360 2014年
定価：本体4,500円＋税
[ISBN978-4-260-02024-4]医学書院刊

心電図を初めて勉強する者は、心臓の電気活動がどのように心電図の波形になるのか、なかなか理解し難いものである。また、心電図学の入門書は多く、どの本を勉強すべきであるのかわからない。結局は心電図の本を読破できずに、何となく苦手としている者が多いのではないだろうか？

本書はわれわれの研究室の大先輩である兼本成斌先生が、多くの臨床経験と長年の学生教育を通して書き上げたロングセラーとなる心電図学入門のための名著である。このため、心電図の取り方から始まり、心電図波形の呼び方、誘導法、心筋の興奮と心電曲線という基礎中の基礎から容易に学べる特徴を有している。本書を読んでいるうちに心電図の波形がどのように構成され、その波形の異常がどのような疾患と結びついているのか、自然と頭に入る仕組みとなっている。読者は「心電図は難しい」などの意識をもつ前に本書を通読することができるので、心筋梗塞や不整脈の心電図を容易に理解できるようになっている。心筋梗塞の部位と心電図の対応も初学者には頭を悩ませるものであるが、本書を読めば心臓の解剖学的位置と3本の冠動脈の走行、心電図の電極の位置が理解できるようになり、むしろクイズのように判読するのが楽しくなる。

不整脈も心臓の解剖と電気的興奮の旋回の仕組みがわかるまではなかなか慣れ親しむことができないが、ひとたび理解してしまうと後は頭の体操となる。そのために、兼本先生は随所にセルフチェックを設けている。このセルフチェックを上手に利用してもらえば、一步一步理解の範囲を広げることができ、いつの間にか力がつくように構成されている。また、本書の特徴にセ

ルフアセスメント問題が付いていることが挙げられる。この問題を解きながら、わからない部分は本書に戻って読み直し、また問題を解くというように進めてもらえば、必ず心電図の読影は上達する。国家試験の問題はもちろんのこと、通常の日常臨床で遭遇するほとんどの心電図はできるようになるであろう。

本書は初版から25年の月日が経つが、その間に心電図学が進歩し、新たな疾患概念も登場した。この間、兼本先生は一貫して遺伝性QT延長症候群、Brugada症候群、カテコラミン誘発性多形性心室頻拍、QT短縮症候群、不整脈源性右室心筋症などの新しい概念に関しても、常に加筆・修正され、本書が新たな学問的進歩を取り込んだ時代に即応した最新の教科書に徐々に変化してきている。ペースメーカーの領域の進歩も目覚ましいものがあるが、これに対しても多くの内容が追記されている。これは、兼本先生が常に本書を入門書であると同時に、最新のものを届けたいという熱意の表れと思っている。

兼本先生が現職で教鞭を執られているときには厳格な先生であったと伺っているが、本書は何事にも几帳面な先生の性格を反映し、隅から隅まで細々とした配慮がなされている。この細かな配慮が本書をロングセラーとして多くの読者を惹きつけた理由であると考えている。これまでも多くの先生方がこの本を読んで優れた医師に育っていった。私は次世代の医学を担う医学生、初期臨床研修医に一人でも多く本書を利用することにより、ぜひ心電図を得意の領域にするよう利用してもらいたいと願っている。